

Title	英吉利帝国は瓦解す可きか
Sub Title	
Author	占部, 百太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.2 (1915. 2) ,p.109(1)- 134(26)
JaLC DOI	10.14991/001.19150201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

傷害保險兼營

普通傷害保險

海陸旅行傷害保險

内地陸上旅行傷害保險

料率低廉 契約簡便 切符販賣

東京市日本橋區本革屋町五番地三井銀行横



共同火災保險株式會社

營業種類

火災保險、海上保險、運輸保險、傷害保險

營業部

東京、大阪、京都横濱名古屋神戸、仙臺福岡

支店所在

三田學會雜誌 第九卷第二號

論 說

英吉利帝國は瓦解す可きか

占部 百太郎

今回の歐洲大戰亂以前に際し、獨逸の教授及び戰略家等は或は著書に於て或は演說に於て一旦英國が他の強國と開戦するが如きことあらむか、加奈陀は必然英國の羈絆を脱し北米合衆國と提挈するに至るであらうと豫言して居たのである。惟り加奈陀ばかりでない、濠洲も、新西蘭も、南阿聯邦も、將た又印度帝國も、機を見て

一齊に獨立の旗幟を翻へし、英國が外敵に惱まざるゝの秋は即ち英吉利帝國瓦解の端緒を開くの時期であると云ふことは、從來屢々論議せられた所であつた。現に我輩の友人間にも恁う云ふ説を唱ふる向がある。今回の歐洲大戰亂に際して、日本が馬鹿正直に日英協約の條章を墨守して獨逸に對して開戦するやうな大早計をしないで、反對に獨逸と提挈して居れば、英國の殖民地を割取することは實に易々たる業であつたのに、實に愚な事をやつたものであると云ふのである。英吉利帝國の組織は果たして是等論者の唱道するやうに其れ程脆弱なものであるであらうか。英國の殖民地や屬邦 (dependencies) は母國政府の統治に對して爾かく不平不満を懷いて居るのであらうか。否、英國の殖民政策は一朝國難に遭遇すれば忽ち其帝國の土崩瓦解を來すと云ふが如き左様に拙劣で不完全なものであるであらうか。左に少しく是等の疑問に對して所見を述べて見たいと思ふ。

二

英帝國の組織に對して、以上の如き悲觀説の頻次繰返さるゝと云ふのは、畢竟するに、英帝國の領土が世界全土の四分一以上の廣さに亘り、其人口が四億以上に上

り、併かも夫れが實に種々雑多の人種から成つて、是等の自治殖民地、王領殖民地、屬邦、特許會社領地、乃至所謂「勢力範圍」(Sphere of influence) 等に對する政體が實に一見亂雜を極めて居るのを見て、速了したのではあるまいか。成程英國の殖民政策は官僚的、專制的、中央集權的の獨佛の夫れとは趣を異にして居る。佛國や獨逸の殖民政策は本國の政體を其儘殖民地に移殖するので、殖民地には先づ兵隊が行く、官吏が行く、立派な官衙や營舎が建造せられて嚴めしい行政組織が第一に出来るけれど、肝腎の商人は餘り行かないで、通商貿易は隨て振はない。舊るい話ではあるが、大王ルイス十四世の如きは加奈陀や西印度の佛領殖民地にまでも國家の統一を行はむが爲め新教徒を排斥して、却て敵側たる普魯士、英吉利、和蘭等の新敎國に利益せしめた愚策を行つたのである。一九〇五—六年度に獨逸は獨領西南阿弗利加の爲に千八百萬圓を費した(此中には土人征討費を含む)のであるが、同地の輸出入總額は同年度に於て四百萬圓の少額に過ぎない。而して獨逸本國よりも幅員の廣大なる獨領西南阿弗利加に住する獨逸人の數は一萬人に過ぎないのである(一九一〇年調)。是等は勿論極端な例であるが、以て獨佛流の殖民地の一般を察することが出来る。所

が英國の殖民政策は商人先づ行いて而して後國旗が之に隨ふと云ふ遣方である。約一千一百四十萬平方哩の廣さに亘る英領殖民地は或は征服に依り、或は外交に依り、或は探險に依て夫れ々々獲得せられたものであるが、英國政府は之を占領して其の領土としても、容易に行政組織を改革したり或は風を變へ俗を移すが如き事をしない。本國と通商貿易上の關係が密切なるに従て、徐ろに適宜の政治組織を立つるのである。其の政治の方法も可成私人の經營に放任して、殖民地が漸く成長發達して來れば、之に自治を許す。母國政府は唯だ總督を代表者として派遣し、大體に於て監督するに止まるのである。此の如き自由放任主義の殖民政策は歐羅巴大陸流の保護干渉主義者から見れば、實に緩慢で危險で今にも分裂しうに見ゆるのは無理もない。然し英國が此の如き自由放任の殖民政策を探るに至つたのは、幾多の苦がい經驗を嘗めた結果である。英國が一七八三年元來母國政府に對して敵意を有つて居た清教徒の子孫たる十三州の殖民地を失つたのは、他に種々の原因もあらうが、ジョージ三世が印紙税法を布いたり、航海法を厲行したり、種々、殖民地の自治に干渉を加へむと試みたるが、主要なる原因であつた。英國が此の最も大切な

る殖民地を失つた事は、其の殖民政策に對して大なる教訓を與へたのである。歐羅巴人種以外の民族に對する殖民政策は自から別の方法に依らねばならぬ事勿論であるが、歐羅巴人種の中でも殊にアングロ・サクソン人種は最も自主自由を貴ぶ民族であるから、其のアングロ・サクソンの移住したる殖民地に對して獨佛流の保護干渉政策を施さうと云ふのは、テンから間違つた遣方である。然し如何に政治的天才ある英國人と雖、何時迄もあの廣大なる領土に對して從來の自由放任主義の政策一天張りでは統治することが出来なくなつて來た。十九世紀の末葉から世界に漲れる帝國主義の潮流は英國にも波及して、其殖民政策は爲に大なる影響を蒙らざるを得なかつた。是等に就ては尙ほ下に詳説する。英吉利帝國の組織は勿論將來の分裂を充分に保障するだけに強固のものでなく、此の帝國組織の問題は實に英國の經世家が最も頭腦を悩ませる難問中の難問題であるが、アングロ・サクソンの國民性及び英國憲法の特質に通せざる一部論者の唱道するやうに、英帝國は爾かく容易に分裂瓦解するものでない事は、以上の説明だけにても略ぼ察せらるゝであらうと思ふ。尙ほ以上我輩の所説を確實にする爲め、今回の大動亂に際して

加奈陀や印度や濠洲等が本國に對して何う云ふ態度を取つたか少しく實例に就て述べやうと思ふ。

三

先づ英領殖民地の中で首位を占め、其の憲法も亦他の大殖民地の模範と仰がれて居る加奈陀に就て語らしめよ。今回の大戦争破裂して直ちに加奈陀人の腦裡に泛びて來た問題は、此の英帝國の危急に際し如何にしたならば最も好く母國を救ふことが出来るであらうかと云ふのであつた。獨逸の學者や軍人が豫言したやうに英國の羈絆を脱して北米合衆國と合同しやうと云ふのは、英語を操る西部の加奈陀人は勿論のこと、佛語を話す南部クエベック地方の加奈陀人と雖、今日にては夢想だもして居ない。尤も現加奈陀宰相ボルデンは熱心なる帝國主義者であるけれど、前宰相ローリヤーの時には加奈陀と北米合衆國との間に互惠的商業條約が出来かゝつて、世人をして加奈陀は終に合衆國に併吞せらるゝであらうとの懸念を抱かしたものである。敵國外寇のない時こそ國家は危いもので、今回の大危機の試験を経て、反て英帝國の基礎は如何に強固であるかと云ふ事が、證明せられた。加奈陀人

は母國の危急に對して其國民性と其資力の蘊蓄を充分に發揮した。是は實に帝國主義者の理想に一步を進めて、將來一層英帝國の組織を強固ならしむる吉兆ではあるまいか。英國の戦争参加後間もなく、加奈陀政府は三萬の訓練ある軍隊と二隻の戦艦と二隻の潜航艇と麥粉一百萬囊を母國に寄送した。單にアルバータ州だけでも、燕麥五十萬ブッセルと總ての官公吏の俸給の百分一を募集して義捐して居る。其他の各州共に、或は穀類或は魚類或は馬鈴薯或は正金等を寄附して夫れ々奉公の誠を示して居る。夫れから軍馬とか、小銃とかモートルボートとかの寄附や市町村自治團、銀行、鐵道會社、並びに重立つた私人からの寄附金も少なからざる額であつた。是等の愛國的行爲の前には實に人種や宗教の區別はなく、併かも加奈陀が富と財源に富むで居ることが充分に證明せられた。尋て乍ら加奈陀には廣漠なる未耕地が存して居るので、今次の歐洲大亂に蹂躪せられて荒廢に歸した土地の産出を補填する爲め、一九一五年度には大に農産物の耕地を擴張する筈である。又一九一二—一三年度には獨逸から千四百五十萬弗、埃太利から百七十五萬弗を輸入して居たのであるが、大戦亂の爲め歐洲の工業衰頹から生ずる欠陥を補ふ可く、

加奈陀でも自國の工業を從來よりも一層獎勵しつゝあるのである。

從來西加奈陀の農夫殊に合衆國から移住した者には「帝國」と云ふ觀念は頗る薄かつた。佛國出身の加奈陀人も亦爾うであつた。所が今回の大戦勃發して以來、加奈陀全體を通じて、海軍力なきときは、折角生産した穀物も其他の商品も海外の市場を失ふであらう、加奈陀を通じて輸出入貿易は直ちに全然休止の狀態に立至るであらう、否、帝國の防禦薄弱なるときは、國民的地位も折角に發達し來つた國家的組織も破壊せられて、北米合衆國に併吞せらるゝか、然らざれば、世界征略の禍心を包藏せる夫の厭ふ可き官僚政治の普魯士に征服せらるゝであらうとの懸念を適切に感ずるに至つた。別言すれば、戦争と云ふ冷酷なる事實は加奈陀人に對して、英吉利帝國の保護が加奈陀の物質的利害と國民的理想とに取て如何程に大切であるかと云ふことを極めて明白に教訓したのである。現に戦争に際して爾かく功果を奏した英帝國各聯邦間の合同は、平和の時に於て一層之を擴張せなければならぬ」と云ふのが、加奈陀人の學むだ貴重なるレッソンの一つである。

四

次に印度、濠州諸殖民地、新西蘭等が英帝國に對する忠義と愛國心の熾烈なることは敢て加奈陀に譲る所はない。是等の殖民地及び屬邦が如何に物質的に精神的に母國を援助しつゝあるかは、少なくとも十萬の印度兵が現に聯合軍に馳せ加はつて自佛の野に勇敢に戦ひ、又散々に太平洋や印度洋を荒れ廻はつた獨艦エムデンが結局濠洲艦隊の手に撃破せられた等の事實を見ても、充分に推測が出来るのであるから、余は故らに茲に一々事實を列擧するの煩を避けやうと思ふ。

濠洲や新西蘭には歐羅巴人種以外の人種多く雜居して居るけれど、是等の土人は迺に文明の劣つた劣等人種であるが故、勿論獨立を遂ぐる實力もなく、隨て國家の統一を危殆ならしむる患はないが、印度帝國や南阿合同 (Union of South Africa) 國には比較的文明の進歩した民族が少なくないので、平常から英國政府も統治上に甚しく苦心して居る。印度には、日頃から英國の統治に對して不平なる國民主義者が少なくない。然し是等の不平黨も開戦以來案外に靜穩である。印度人は非常に熱情ある國民であるだけ、或土人王の如きは却て英本國人よりも今度の戦争に熱中して居る者もある程である。獨逸が土耳其を煽動して神聖戦争を叫ばしたけれど、あ

の廣大な印度帝國内に於ける多數の回々教徒は何うも其手に乘らぬやうである。今後戦局が英國に取て如何に不利なる形勢に向ふ可きかは固より豫測の限りでないが、印度が今次の大危機に乗じて獨立を遂げやうとは我輩の信する能はざる所である。

夫れから南阿合同國は他の英領とは多少趣を異にして居ると云ふのは英國がトランズヴァールやオレンヂ自由國を征服して今日の合同を遂げて以來、未だ日が浅いからである。三十萬以上の大軍を引受けて足掛け三年間勇敢に抵抗したボーマ人の間に、英本國の危急に乗じて叛亂を企つる者の出づるのは、決して怪しむを要しない。然し其れもホンの一少部落の一揆で、今では南阿合同國を危くする程の勢力は勿論ないやうである。又た南阿合同國には首相ボータ將軍に反對して英吉利帝國の爲めに今直ちに獨領西南阿弗利加を征服せずとも、林檎の熟するを待つが可いと云ふ冷淡なる所謂中立黨がある。所がボータ將軍は其のボーマ人固有の熱辨を揮つて、今南阿合同國の採る可き道は二個の外開けて居ない——忠義で本國を援助するか、不忠で本國に叛くかである、此他に中間の道はない。若し其れがある

と云ふ者あらば、彼は南阿人を誤る者である。南阿人は此の二道の何れを探らうとするのであるかと演説した。是れに對して “We want the loyal course ; you have done the right thing” の喝采を以て迎へられた。此のボータ將軍の演説に徴しても、南阿の大勢は英國の爲めに必ずしも悲觀するに及ばないやうである。若し南阿にして獨領征略に應じない場合には、英本國では印度兵五萬を派遣して獨領西南阿弗利加の占領を企つ可しとの議もある。又南阿合同が母國の要求に應ずる場合には、英國政府から七百萬鎊を補助すると提言して居る。

以上は今回の大戦亂に際して、世人の想像するやうに英帝國が容易に瓦解して分裂するものでないのみならず、却て此の大危機の爲め帝國の結合は一層強固を加へ、尙將來平和回復の場合、帝國主義の氣運に向て極めて好望なる兆候を示した次第を略ぼ説明し得たことゝ信する。我輩は更らに英吉利帝國は憲法上如何に支配せられて居るか、輓近英國の帝國主義は如何なる方向に發展しつゝあるか、是等の諸點に就て説明を加へ、以上の所論を一層確めやうと思ふ。

五

英國の海外領地と母國との間には、憲法上五個の連鎖がある。(一)國會に於ける國王(King in Parliament)は單に合衆王國に於ける君主たるばかりでなく、又英吉利帝國に通じての君主である。理論上英國王は印度、ジブロータル、蘇格蘭、ウェールズに對して立法し得るが如く、濠洲聯邦に對しても、加奈陀聯邦に對しても、一樣に法律を制定し得るのである。實際上英國王は或る一殖民地議會の權能以外に屬する、英吉利帝國全體に共通なる或る目的に對して、極めて廣大なる立法權を有つて居る。商船に關する數多の法律は、之が適例である。英帝國國會は又帝國に對する憲法制定議會(Constituent assembly)で、加奈陀、濠洲、南阿の現憲法は何れも合衆王國の國會が制定した法律に基いて出來たものである。次に英帝國國會は殖民地議會を通過したる疑義ある法案を認可するに方て、之に干渉することが出来る。夫れで英帝國國會の殖民地に對する立法上のオーソリティーは唯だの形式に止まらずして、現實である。(二)大英國王は其の總ての殖民地を通じて最上權を有ち、種々の方法に依て之を行使するのであるか、是等の方法中殊に重大なのが二個ある。(イ)國王は殖民地の議會を通過した法律が假令自己の代表者たる總督の同意を経たものでも、之を否認

することが出来る。(ロ)若くは國王は法律を否認せしむ可く、總督に訓令を發することが出来る。尙英國王は帝國全體を通じて唯一名譽の泉源で總ての勳章位階等は母國に於けると同様、殖民地に於ても惟り國王の授與する所である。(三)英國王は又有ゆる殖民地の總督を任命する。(四)外交政策の問題殊に宣戰媾和の事は全然母國政府の權内に保留されて居る。(五)帝國組織に於て如何なる地位を占むるを問はず、總ての海外領地は英本國樞密院の司法委員會に向つて上告する事となつて居る、

以上は合衆王國と其の海外領との間に於ける法律上の連鎖であるが、單に紙上にのみ就て見れば、夫の如く廣大なる組織の基礎としては、甚だ薄弱なるかの觀がある。然り、單に憲法上の連鎖にばかり依頼して、帝國の結合を圖らうとして居たならば、世人の多くが想像した如く、英吉利帝國は夙くの昔分裂の不幸を見たかも知れない。幸に其事のなかつたのは、法律的統一及び憲法上の連鎖の外に、帝國を通じて感情の一致と利害の共通があるからである。既に述べたやうに、第拾九世紀の末、葉以來英國に於ける帝國主義は頓に氣勢を加へて來たと同時に英國王に對する各殖民地の忠義奉公の觀念は漸く親厚に趣いた。所が其以前に方ては、晩年熱心な

る帝國主義者と豹變したデズレリイさへも磨石の如く我が英國人の首に繋れる其等の劣惡殖民地と喝破したのであつた。又或政治家は殖民地は宛かも果物のやうに熟して下れば親木から墜ちて行くものであると謂て、厄介視した「吾々が是等の劣惡殖民地の厄介を脱れ得るの日は果して何れの日であらう」その不満の聲は英國人の口々から漏れたのである。此の如く英國人が殖民地を厄介視したのは、千八百四十年代に於ては決して不思議とするに足らなかつた。英國と云ふ疲れたる巨人は其實帝國の重い負擔に呻吟して居たのである。當時全盛のマンチェスター學派は一齊に自由放任主義を唱道した。自由放任主義の帝國主義と全然相容れざることを云ふ迄もない。所が過去三十年の間に、帝國主義の思想は驚くばかりに進展して來た。英國の政治的領分の觀念は擴大して隨て英國王の政治的活動と其の勢力は、今や世界の邊疆に迄及び、所謂日輪其の境に沒せざるやうになつて來た。現皇ジョージ五世が繼承した帝國は、ウィリアム四世がヴィクトリア女王に傳へた帝國とは外形的にも内面的にも甚だしく相違して居る。英國に於ける政治の中心點は移動し始めた。英國の内政や對歐羅巴の外交政策に比して一層廣い英國王の政

治的活動の天地は展開せられたのである。是等の殖民地に對する英國王の愛護の念切なるに連れて、殖民地の方に於ても亦、英吉利帝國に對する忠義の觀念の熾むになつて來るのは、畢竟制度の力に依るのでなくして、人の力に依るのである。即ち名義上に過ぎない英帝國國會に對する忠義ではなくして、英吉利帝國皇帝に對する忠義である。一言にして蔽へば、英國王は特別な意味に於ける帝國統一の精神と云ふ新思想の擁護者で且其の權化である。

此の如く英帝國統一の中心として英國王の地位が益々強固を加ふるに至つたのは、勿論各殖民地と母國間の利害感情の一致して居る點多いが故に相違ない。けれども是等の利害や感情の連鎖は歲月に連れて變化し行き、或は薄弱となることも免れないのであるが、唯だ共通の君主に對する忠義の觀念ばかりは永續するばかりでなく、實に年代と共に益々増加する一方である。

六

四五十年前まで殖民地に對して以上の如く冷淡であつた英本國が、殊に過去三十年來急に本國と其殖民地との間の關係を従前よりも一層密切にしやうとする

に至つた動機は何れに基因して居るのであるか。第拾九世紀の末葉以來英國に帝國主義の風潮の盛大になつた原因を數ると、凡そ下の四つに歸すると思ふ。

(一)加奈陀、濠洲、喜望峰等の發展は自から全世界の注意を惹くに至つたのであるが、英國自身殊に是等殖民地の價值を認むるやうになつて、是を領有することゝ傲りとするに至つた。夫れから英國は自由貿易主義を把持して居るので、穀物其他の物資を外國殊に自己の殖民地に仰がざるを得なくなつた。(二)他の列強が領土を擴張した事も亦英國に對して多大の刺激を與へざるを得なかつた。伊太利や獨逸は統一を遂げ、一方に於て北米合衆國も亦急激に膨脹した。併かも獨逸も米國も人口の點に於ては、英本國を凌駕するやうになつて、單に英國のみを以てしては、以前列強の間に占めて來つた優勢なる地位を保持することが出來なくなつた。(三)歐洲列強の間に急激なる軍備擴張の競争が開かれたことも亦英本國に對して殆ど堪へ切れない程の軍備費を負擔せしむるに至つた。仍で英本國は其の殖民地が此の重い軍備費の幾分を分擔するに足るだけ充分成長發達して居ると感ずるに至つた。(四)英帝國內に於ける各殖民地が一層聯合を強固にしやうと希望するに至つたの

は、疑もなく他國に於ける帝國統一の成功に因て、刺激せられた。五十年前まで大仕掛の聯邦の例としては、唯だ北米合衆國があるばかりであつた。併かも其れが永續するが何うかは隨分疑問とせられた。所が爾來合衆國は益々其の強固を加へ、獨逸も亦同一の形式を以て統合せられ、瑞西も亦此の方法を採用して繁昌した。のみならず英國自身の殖民地中で最も大なる加奈陀、濠洲、最近には南阿諸殖民地も統一せられた。是等の統一せられた諸殖民地を更らに統一して聯邦制度を布き、茲に英帝國の組織を此上一段強固にするのは、全然不可能でないと思惟せらるゝに至つたのは、洵に自然の順序である。

七

然し英國が帝國聯邦の組織を遂ぐるには、憲法上、軍事上、經濟上幾多の難關がある。先づ聯邦組織に加はる可き領地は總長ローウエルの主張せる如く、英本國の外、加奈陀、濠洲、喜望峰等の所謂自治殖民地に制限せねばならぬ。何となれば、自から治むることの出來ない人民は確に他を支配すること出來ない筈である。例せば印度の如き、西印度の如き、其他の王領殖民地(Crown Colony)の如きは、帝國一般の防禦の

荷はなければならぬけれど、代表者を帝國會議に派遣する資格はないのである。然る負擔はし負擔は課せられて發言權は與へられないとしたならば、果たして是等の諸邦が不平を起さないであらうか。

次ぎに軍事上の困難と云ふのは、現今英帝國各殖民地の防備は未だ充分でない。此の重大なる國防の點に於て、各殖民地は殆ど全く母國に依頼して居る。現に今度の戰亂に際して、英國は太平洋印度洋の方面では日本艦隊の援助を借り、太西洋や地中海方面では佛國艦隊と協同して、幸に獨逸の海軍力を殆ど一掃したけれど、彼の如き廣大なる帝國領防禦の義務は事實母國の負ふ所である。而して之が財政上の負擔は是れ亦殆ど全く合衆王國納稅者に歸して居る。一九一二年に開かれた殖民地會議 (Colonial Conference) の爲めに編輯せられた數字に據れば、英吉利帝國海軍に對して合衆王國の負擔は人口一人に付き十五志一片であるが、自治殖民地平均一人の負擔は唯だ四片に過ぎない。是れと均しく、陸軍の費用も合衆王國一人割拾四志一、四分の三片に對して僅かに二志五片である。然も事態が今日の儘である限り、是れより外に方法はない。外交政策は一切ダウニング街から割り出され、母國

政府が惟り宣戰媾和の責任を有つて居る。各殖民地が全く帝國の政策に參與せざる以上、其の政策に因て發生する危急に應じて責務を負う能はざるのは、當然である。併し各殖民地が何時まで帝國の政治から除外せらるゝことに満足して居るか、從來と雖、此の除外に對する不平は屢々繰返されたのである。

英本國と其の殖民地とを結合して居るのは、人種、宗教、慣習等が同一であること云ふ感情即ちセンチメント、殊に前にも述べたやうに、其通の君主を戴くと云ふ事が主となつて居るけれど、母國が此の如く些少の金錢を徴して、各殖民地に對して國防上の保護を加へる事が亦、其間の最も強き連鎖となつて居る。然し英國が加奈陀、濠洲、南阿等の重なる殖民地に責任政府即ち自治を許して以來、強國と開戦したことはなかつた。隨て母國と其殖民地との結合が何れ程強いか未だ試験されなかつたので、一朝國家の危急に瀕したならば、果たして何うであらうかと、一部の帝國主義者は隨分此の點を杞憂した。一例を挙げれば、若し先年のヴェネスエラ問題に關し英米の間に戰爭破裂して、合衆國が其の防禦のない海岸諸市の英海軍の爲めに受く可き損害に對し、加奈陀と合衆國とに夾まるゝ大湖水の西岸なる小麥の産

地を占領するとしたならば、加奈陀は中立を宣言して其の危険を避くるの態度に出ではすまいか。換言すれば、自治殖民地は自から招かない而かも充分領土の保護を得ない戦争に際して、自家の大なる損失を賭しても、尙本國に對する忠義を保持するであらうか。とは、當時英吉利帝國の爲め一般に氣遣はれた所であつた。所が是等の心配は前にも説明したやうに全く杞憂に過ぎないで、今次の戦争に依て英帝國の結合が案外強固であることの證明せられたのは、我が同盟國の爲めに祝す可きである。英吉利帝國の安全否、恐らく其の生存は、英國が帝國內の各部分と交通し而して之を防禦する力量に依るのであるが、其の力量は實に海上權を制するに存する。ローウェル總長は謂つて居る。遠隔の地に自治の殖民地の散在して居ることば、帝國聯合の障害であるけれど、海上權の方から見れば、之が反て便利である。英國は世界各地に要塞地を有つて、自國の海軍には通路を開放するけれど、敵に對して之を壅塞する。併かも遠隔せる大殖民地の多くは、母國に物産を供給し、海上に於ては他國の侵略に對抗する力を有つて居る。且又濠洲、喜望峯、其他の諸島、並びに今度土耳其と開戦の結果英國が其の保護國なりと宣言した埃及は陸上から攻撃す

ることは出来ない。加奈陀は合衆國と境を接して居るけれど、英米間の開戦は上に述べたやうに容易に有りさうに思はれない。故に自治殖民地との關係は今後と雖、非常に緊張することは有り得べけれど、英國が充分なる海軍を具へて居る限り其間に於ける連鎖の切斷さるゝことは滅多に有り得ない。而かも英國の富力を以てしても、海軍の負擔の重きに堪へ得ない程なので、其の殖民地に對して公々然負擔を分たうと望むのは無理もない事であるけれど、課税は參政權に伴ふものであるとは、アングロ・サクソンが昔からの信條であるから、此點に關して難題が存して居るのである。

夫れから經濟上に於ても帝國聯合の前途には數多の困難なる問題がある。獨逸統一が完成せられたのは、ビスマルクが一八七〇年の戦捷に乗じて斷行した鐵血政略の賜たること云ふ迄もないが、之が統一の前に方て、既に關稅同盟が出来て夫れ迄獨逸の發展を阻害して居た經濟的割據主義が打破せられて居た爲め、夫の如き大成功を收めたのである。惟り獨逸ばかりでない、近世的國家の統一事業は、大概、經濟的統一が先驅となつて居る。英吉利帝國が強固なる聯邦組織を立てやうとす

るには、先づ母國と各殖民地との間に從來よりも一層經濟上の親密なる關係を造らねばならぬことは申す迄もない。之を外間から觀察すれば、英本國は從來よりも一層政治上及び財政上の關係を密切にしやうと希望して居るに對して、殖民地の方では主として通商上の關係を鞏固にしやうと力めて居るやうである。故のジョセフ・チェームバレンは熱心に英本國及び帝國殖民地間の關稅同盟を主張したけれど、之が爲め時の宰相バルフォアと意見の衝突が起つて結局統一黨は政權から離れ世は自由黨の天下となつたのである。自由黨が其の重なる支持者たる労働者の爲め食料品の價格騰貴を恐れて關稅同盟の事を斷じ得ないのは、英帝國聯邦組織を強固にする非常の障害となつて居る。併し自由黨政府と雖、決して非帝國主義ではなく、其の教條とする自由貿易主義の範圍内に於て帝國組織の強固を圖る可く、種々經濟上の施設を試みつゝあるのである。現に汽船の航路や、海底電線は大に擴張せられ、帝國一片郵便制度も夙くに確立せられて居る。特惠關稅の制度も亦多くの自治殖民地に於て制定せられ、母國よりの輸入品に對し之を實施して居る。併し母國と其の殖民地との間に蟠つて居る關稅の撤去せらるゝのは、果たして

何れの日であるか今の處前途漠然として居るのである。

八

以上は英帝國聯邦組織に對する憲法上、軍事上、經濟上の困難なる諸點であるが、帝國主義の鼓吹熾むなるに連れて、英國政府は餘程久しい前から、應ては強固なる帝國組織の實現に資す可き豫備の試験を行ひつゝあるのである。夫れは即ち帝國會議の設置である。此の帝國會議(Imperial Conference)の第一回は一八八七年故の女王ヴィクトリアのジュビリーの時開催せられ、當時有ゆる英領殖民地の代表者が倫敦の町に盛大なるプロセッションを行つて、傍觀者を驚かした。是れが大に列強の注意を惹いて、爲めに英國の富強を羨むの念を刺戟して世界の帝國主義の風潮に一段の氣勢を加へたのである。其後一八九一年と一九〇二年と一九〇七年に開會せられ、一九〇七年の開會の時始めて帝國會議と稱することになり、且四年毎に開會と決定せられた。最近には一九一一年に開會せられた。此會議に列席するのは英本國宰相、殖民大臣、各自治殖民地の首相及び他の代表者であつて、代表せられた各殖民地は各一票宛の投票權を有つて居る。勿論會議は相談會であるから、決議を

強行する譯には行かない。即ち英國政府の一機關と云ふよりも、寧ろ外交家の會議 (Congress) の性質を帯びて居る。夫れでも母國と殖民地が互にアンダースタンドして、其の間の聯絡を助ける利益は少くない。然も相互の利害が常に必ずしも一致すると限らない。那樣な場合には政府は必ずしも一般の同意を待たないで、強いて究極の權威に服従せしむるの外はない。此外に英帝國々防會議 (Conference on Imperial Defence) と云ふのがある。本國の主要大臣、軍事當局者、殖民地宰相等の會議で、英帝國々防上の協議をするのである。帝國會議は今迄の所で未だ充分の效果を見ないけれど、之が帝國聯邦組織の第一着歩たること、決して疑を容れないのである。

九

元來英國人は政治的資能に富む國民であるから、此の帝國聯邦の組織は必ずしも彼等に取て不可能事とは云へない。所が局外者から見れば、英國の公衆は此の事業の困難を重大視せないやうにも見へる。彼等は凡そ聯邦の密切なる合同を遂ぐるには、之を組織する各邦國が互に其の權力を讓歩して始めて成るものであるとの歴史上の教訓を閑却して居るかの觀がないでもない。現今の瑞西聯邦は Sonderbund

の戰爭を経て成つたのである。又獨逸帝國は鐵血政略に依て組織せられたもので、決して演説や多數決の投票の功果ではない。夫れからジョン・クインシー・アダムスは米國憲法實施五十年紀念祝典に際して、合衆國憲法は "Extorted from the gring necessity of a reluctant Nation" と述べたではないか。マリオット教授は其の English Political Institution (拙譯「英國の憲法政治」) の結論に於て「第二帝國(第一帝國は米國獨立以前を謂ふ)の來るや、決して目に見へては來らざりき。シーレーの所説に據れば、英國が世界の半ばを征服せしは、虚心平氣に仕遂げしなりき。此の警句は一部の眞理を含めり。左はあれ、英國人の天才が細心以て憲法の機關を完全ならしめむことを冀はざるは眞實なり。精巧なる組織を好まざる英國人の天性は其の根源極めて深し。然れども、世界の狀態は激變しつゝあり。科學は經驗過重主義 (Empiricism) と相容れず、豫考と熟練とは機會の領分を制限す可し。組織なき者は果たして科學の原理に依て行はるゝ今日の大競争場裡に生存するを得る乎云々の苦言を呈して居る。我輩は今回の大戰争に於て英國が結局の勝利を制す可きことを信せむと欲する者であるけれど、英國人が餘りにお國自慢の念に強く他の長所を採つて自家の欠點を補ふ日頃の熱

心の足らなかつたことを今回の戦亂に於て痛切に感じて居るのではあるまいかと、他所ながら推察せざるを得ない。要するに、英國が今後獨逸の科學萬能主義に學ぶ可き點は、蓋し少小であるまいと思はるゝ。英吉利帝國の汚隆興廢が今回の世界大戰の勝敗如何に關係するもの大なるは申迄もないのである。(大正四年一月四日稿了)

歐洲戰時の中央銀行

堀江 歸一

本論に於ては、歐洲戰時に於ける交戦諸國の中央銀行に關する諸問題例へば銀行利率の變動、銀行紙幣并に正貨準備の増減、戰時特殊の營業方法等に就て、論述することを期したり。然も中央銀行中、戰時營業報告の發表を中止したるものあり、又營業報告の發表を繼續するものに於ても、戰時に於ける特殊の營業方法の明ならざるものあるが故に、充分に各國中央銀行に亘りて、比較研究を試みる能はざるを遺憾とす。立論敘事の足らざる所は他日を以て補正するの機會ある可し。曩に公にしたる小著「歐洲戰時の經濟財政に於ける敘事にして、本論と矛盾するものあれば本論の敘事を以て、正しきものと認められんことを希望す。

第一 銀行利率